

寄 生 虫 検 査

動 向

平成7年度の学校保健法の改正後、ぎょう虫卵検査の対象学年は県下一部地域を除き、小学校1～3年生までとして定着している。今年度は前年度に比べ受検学校数は20校増（1.4%）となり、受検者数も9,891名増（3.4%）となった。ぎょう虫卵陽性者の割合は年々減少し、前年度と同様に1%を下回り、0.28%となった。同様に寄生虫（ぎょう虫）ゼロの学校の割合も全体で73.7%となり、ぎょう虫卵検査の本来の目的を達成しつつある。当協会ではぎょう虫卵検査に限らず学校保健分野の検診、検査において従来の形を踏襲するだけではなく、学校現場の要望に答え、行政、医師会等と連携を保ち、社会の変化に対応できる検査態勢を今後も進めていく。

方 法

ぎょう虫検査

ぎょう虫は他の寄生虫と産卵の仕方が違う。人の体内では卵を産まず、産卵時期になると夜間肛門から這い出して肛門の周りに卵を産む。このため、当施設では肛門周囲に産卵されたぎょう虫卵を検出するウスイ式セロハンテープによる二日連続採卵法で検査を行っている。検査を受けるにあたっては朝起きてすぐに、検査紙を肛門周囲にあてる。排便後では肛門周囲がふき取られるために検出率が極端に低下するので注意が必要である。

精度管理

顕微鏡検査による見落としを防ぐため一度検査したものを再検査し見落としを防ぐとともに、毎日の陽性率をチェックし一定の陽性率であることを確認している。

結 果

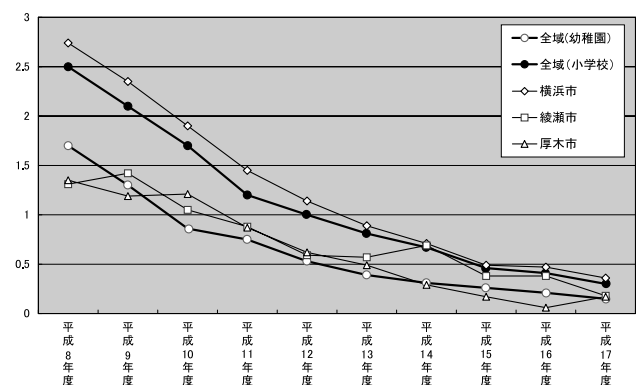
受検学校数、受検者数、保卵者率（陽性率）などを表1に示した。保卵者率（%）は前年より0.08%減少し0.28%となった。更にぎょう虫保卵児童生徒がまったくいない学校（寄生虫ゼロの学校）は1000校を越し1028校（73%）になった。

過去10年間の蟯虫陽性率の年次推移を図に示した。幼稚園児の陽性率を（○）で、当施設で実施している全小学生の陽性率を（●）で示した。また年1回法で検査を実施してきた主要都市横浜（◇）、及び7年度まで年2回法を実施してきた綾瀬市（□）、厚木市（△）の陽性率年次推移（小学校）をそれぞれ示した。陽性率の推移をみると、平成8年度から15年度まで一環して減少し続けているのがわかる。15年度からは緩慢となっているが17年度時点でも減少傾向が続いていることに変わりはない。小学生を

見ると、横浜市では平成12年度の陽性率が1.14%、15年度は0.49%、この間の減少率は0.65%で毎年ほぼ0.2%の減少傾向が続いている。16年度は0.47%で横ばいとなったが17年度は0.36%で前年に対して0.1%減少した。早くから年2回法を実施してきた綾瀬市では12年度の0.59%から15年度は0.38%、4年間で0.21%の減少にとどまった。16年度は15年度と同じ0.38%であったが17年度は0.18%となり更に0.2%減少した。同じく年2回法を実施していた厚木市も同じような傾向を示し、12年度0.62%から15年度は0.31%で0.31%減少した。更に16年度は0.06%まで減少したが17年度は0.17%で若干上昇した。小学生全体で見た時、平成8年度の陽性率2.5%から12年度の1.0%まで一気に減少したが、その後17年度にかけての減少傾向は緩慢になってきた。また、幼稚園の陽性率は8年度の1.7%から10年度0.86%まで2年間で1%近く減少した。その後も徐々に減り続け17年度は0.15%まで減少している。

ここ数年のぎょう虫陽性率の推移、特に0.5%を切ってからは緩慢な減少傾向が続いている。このままぎょう虫症が終息に向かうのかどうか、今後のぎょう虫卵陽性率の動向が注目される。

図A りょう虫陽性率の推移



関係の集計表は145頁に掲載